
大海賊時代に來た死神

死神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大海賊時代に来た死神

【Nコード】

N4503Y

【作者名】

死神

【あらすじ】

現世で寝てしまった死神零番隊長。起きたら何故か大海賊時代のONE PIECEの世界に居た。その主人公（死神）が海軍に入って頑張る話。

1 あれ？ここはどこですか？（前書き）

作者が書いてる2作品と同じ名前ですが、設定は同じですが、話と繋がってません。

1 あれ？ここはどこですか？

ここは、海軍本部の医療施設の一室。

「う・・・？？？なんでだ？」

疑問を持っていると、

ガチャ

？？「おお。起きたかい？」

「（誰だ？）はい。」

？？「おっと、自己紹介をしてなかったね。私は海軍本部駐在の医療班員のアスクだよ。」

「俺は何故ここに居る？」

ア「信じてくれ無いと思うが、本当の話なんだ。君以外の海兵らが目撃しているからね。」

「だから、なんだ。」

ア「いいかい、良く聞いてね。今日は全員集合して情報会を朝開いてたんだ。医療班も一応海兵だから、集合してたよ。それで開いてから20分位たった時かな？突如左の空間にヒビが入ったんだ。全員何事か！？って騒いだんだ。そしたら、ヒビが開いたんだ。まるでチャックを開けるように。その中から君が出てきたんだ・・・
・・・信じられるかい？」

「そうか。俺は、そこから来たのか。」

ア「!?!?・・・普通、驚くでしょう?」

「本当は驚いてるさ。自分でも分からない。なんでこんなに冷静なのか。」

ア「そうかい。」

「で、ここは?」

ア「ここは海軍本部にある医療施設の一室だよ。」

「海軍本部??」

ア「海軍本部は偉大なる航路の真ん中にある島^{グランドライン}“マリンフォード”に建設した建物のこと。海軍総本山でもあるけどね。」

「・・・・・・」

ア「ここは精鋭が集まってるんだよ。」

「海軍ってなんだ?」

ア「海軍から知らないのかい?教えてあげるよ。世界政府直下の海上治安維持組織だよ。」

「そうか。」

ア「そういえば、君の名前はなんだい?」

「俺は櫻井海。」

ア「海君だね。もうそろそろ、情報会に戻らなければならない。君も連れてかなければならないけど良いかね？」

「ああ。」

海軍か……。海兵は……。海軍兵士の省略言葉か。

そして、5分位歩いてオリス広場に着いた。
??「報告しろ。」

ア「はい。名前は櫻井海。海軍をしらないそうです。」

「（この変な人は誰だ？）」

ア「どうした？」

「いや、あの人誰かなー？って、思ってただけ。」

ア「あの方はセンゴク元帥だよ。」

「元帥？って何さ。」

ア「あれ？まったく軍隊のことは知識無し？」

「かもな。」

セ「（困ったぞ。）」

ア「軍隊の中で一番偉い人だよ。」

「あ、そう。」

セ「（こいつは何者だ？）」

ア「あとでこっつのは教えるからね。」

「お・・・おう。」

セ「こっちから聞いていいか？」

「なんだ？」

ア「おい、だから敬語！」

「アスク、俺は敬語が苦手なんだよ。」

ア「間違っでも言っただ方が良いと思うが？」

「多分、言っただ事無いから無理。」

ア「言っただ事も無いのかい？」

「そうだよ。」

セ「聞いてるか？」

「聞いている。」

セ「何故、海軍を知らない？」

ア「（それ、私も聞きたかった。）」

「俺が居た所は、軍隊なんか関係無かった。てか、軍隊すらない。」

セ「軍隊が無いだと!？」

「てか、俺が見えるのか？」

セ「何を言っている？」

「ちょっと待ってろ。」

そう言つて、刀を収納する。すると白い隊長服が黒に、黒い死覇装の上が白いＴシャツに、下が薄水色のジーンパンに変わった。

セ「何だ!今のは!？」

「今の格好が見えるのは当たり前。さっきの格好は普通、見えない。」

セ「何故だ。」

「違う世界に来た影響かもな。」

セ「違う・・・世界だと!？」

「だから、言ったじゃねえか。俺の居た国は軍隊なんて存在しない。代わりに自衛隊が存在する。自衛隊については質問するな。」

セ「・・・だが、何故普通の人が見えないのだ？」

「さっきの格好は、“死神”の格好だ。」

全員「「「「「！？」」「」「」「」」

ア「（“死神”！？）」

「黒い死覇装を着て斬魄刀を持つ人をそう言う。別に無差別に殺すというお前らの思想とは全然違う。」

セ「死神は何をする。」

「俺らは悪霊・^{ホロウ}虚の退治者だ。」

セ「^{ホロウ}虚？」

「大体巨体だな。あれが普通サイズだからな。」
そう言つて、快速船を指す。

セ「！？・・・まさか！？」

ア「（情報と一致してる？）」

「分かったか？死神は護廷十三番隊に所属している。」

セ「じゃあ、貴様は？」

「一番隊〜十三番隊まであるが、俺は零番隊だ。一人のみだ。」

セ「何故、隊が違う。」

「一番隊の隊長が一番強いようになってるんだけど、俺、そいつ・・・山じいより強いからそうなった。山じいより経験は少ないけどな。死神の寿命でどのくらいなのかな？山じいはもう千年生きてるけど。俺は25年。」

セ「！？」

ア「千年！？」

「そつだよ。死神はまだ生きる。」

セ「そうか。だいたいの事は分かった。そこの列に並んでいれば良い。情報会を再開する。」

だいたいの事は分かってもらえたかな？

1 あれ？ここはどこですか？（後書き）

どうでしょうか。ボーっとしてたら思いついた。

感想等、お待ちします。

2 主人公設定とオリキャラ設定

〃 主人公 〃

【名前】
桜井 海さくらい かい

【職業】

トリップ前：死神

護廷十三番隊の特別部隊、通称“零番隊”所属。零番隊長。

トリップ後：海兵

海軍本部の海兵。

【年齢】

見た目：14歳

実際：25歳

【戦い方】

トリップ前：鬼道と（白打と）斬魄刀一刀流

トリップ後：鬼道と斬魄刀一・二・三刀流と覇気

【斬魄刀】
（青龍）せいらめう

主に水関係の能力を持つ。

〔銀虎〕
ぎんこ

主に電気系の能力を持つ。

〔黒鷹〕
くろたか

主に闇系の能力を持つ。

この三本はそれぞれ伝説級の斬魄刀と言われている。その三本を同時に持った者は最強の死神になると言われているが、海が持つまで信じる者は居なかった。これも、海が零番隊に入ったきっかけ。

【降魔剣】

別名“俱利伽羅”と呼ばれる、不思議な刀。

〔白鳳凰〕
はくほうおう

刀を抜けば封印されている白い炎が開放され、白い炎を纏いながら戦う。

降魔剣には珍しい治癒能力と火系の能力を持つ。

【零番隊】

隊が着いているが、入ってるのは海一人のみ。入れるのは、山本元柳斎重国もと“山じい”こと一番隊長より実力があり、中央四六十室にも認められないと入れない最強部隊。

隊花：“オリーブ” 花言葉：“平和”

【覇気】

特殊な“覇神の覇気”

【その他】

- ・生まれつき特殊能力と不思議な体質を持つ。それはゼウスの実の息子であるため。
- ・潜水能力が高い。
- ・資格が大好きで合格した数が100を超えている。

【弱点】

- ・気温が40度越えた日。
- ・参謀系

“オリキャラ”

【名前】

アスク

【職業】

海軍本部准将兼本部駐在医療班員。

【能力】

悪魔の実の能力者では無い。

【覇気】

見聞色と武装色が特化していて、戦闘に向いている。

【その他】

- ・六式の使い手
- ・ドレークとは仲が良い。
- ・次期医療班長
- ・来月に少将に昇格する事が決まっている。

〃世界観〃

原作通りの大海賊時代。違うのは、ホロウ虚が存在するのみ。
(後、海が居るだけ。)

とりあえず、こんな感じです。まだまだ本編でオリキャラがバンバン出てきます。

2 主人公設定とオリキャラ設定（後書き）

アスクの職業の所、漢字だけだから、読みにくい!!?!?
次回は主人公が疑問を持ちます。

3 なんでもまた事情聴取をしなければならぬ

「オリス広場」

セ「情報会を再開する。次！」

??「はっ!!^{イーストブルー}東の海で、魚人海賊団を発見。……………」

「なあ、アイツ誰？」

ア「ああ、あいつはライン。海軍本部准将だよ。」

「へへ。じゃ、魚人は？」

ア「なんて説明すれば……まあ、生まれつき人間の腕力の10倍の力を持つてる種族かな？あと肌の色が違うのと水かきがついてることかな？ほとんどの魚人とか人魚は魚人島に居るよ。」

「ほえへ、ここはいろんな種族がいるんだな。」

ア「ああ。ん？」

「どうした？」

ア「あの、元帥。なんですか？」

セ「……………少し、声を小さく出来ないのか？」

ア「あー、無理です。」

セ「まあ、良い。これで、情報会は終了だ。だが、まだ集会は終わらない。」

「え！？終わっちゃったの！？」

ア「うるさい。」

ガ「何故じゃ、センゴク。」

セ「死神の情報がそんなに無いだろ。」

ガ「なるほど。」

セ「分かったか？聞くぞ。」

「……………」

なんか違うね？さっき“だいたい分かった”って言ってたぞ？

ア「返事くらいしろよ！」バシッ

「イテーよ、つたく。」

セ「……ゴホン。気になってるのは沢山ある。順番に聞いていくが良いか？」

「もう、良いよ。どんどん質問して来い。」

セ「まず、斬魄刀から。」

「斬魄刀は死神か死神代行しか持てない。斬魄刀を選ぶ事も出来ない。斬魄刀が持ち主を選ぶんだ。」

モ「ちよつと、待った。」

「？」

モ「ああ、私はモモンガ。海軍本部中將をやってる。よろしくな。」

「おう、よろしく。で、質問は？」

モ「斬魄刀って本当に存在するのか？」

「さっきの刀が斬魄刀だけど。」

モ「そうか、“伝説の刀”って、呼ばれる斬魄刀は存在したのか。」

「降魔剣も在るぞ？別名“俱利伽羅”」

ア「え？あれも在るの？」

「おう。まあ、それは後で。」

セ「順番と言ったが2つしかない。次で最後だ。『ホロウ虚』についてだ。」

「虚か。」

セ「そうだ。」

「虚は、現世を荒らす悪霊。その正体は何らかでの理由で落ちた人間の魂。人間の魂魄が主食で、生きた人間を襲っては死に至らしめる。と言う生き物みたいな奴。」

ア「どんな奴だよ……。海賊より悪じゃねえか。」

「かもな。」

ア「特徴とかは？」

「特徴は、ある例外を除いて白い骸骨のような仮面を付けている奴。仮面は心を失った本能を隠す為だとか。」

ア「へえ。」

「あ、ちょっと待って。虚について一気に話すからメモしたい奴はしといった方が良いと思うよ？」

そう言ったら、ほとんどの海兵・記者がメモを取り出す。まあ、記者は妙な貝？を取り出したけど。あれって、ボタンがあるんだね。始めて見た。

「大きさはいろいろ。小さいほど知能が高く、強い。逆に大きいほど知能は獣と同じくらい。……。」。」

まあ、ここは省略する。長いから。

（12分後）

「分かった？」

セ「ああ。だいぶ分かった。それで言いたいことがある。」

「？」

なんだ？

セ「アスク。お前が言え。」

ア「はい。海。さっきの虚はこの世界にいるんだ。」

「！？」

なんで！？

ア「今日からちょうど1ヶ月前だな。虚がこの世界に来たのは。」

「……（マジで！？どうやって来た！？）」

ア「その虚がこの世界で暴れてる。多大な損害を生んでいるのはその“虚”だ。」

「損害つて、島を荒らしたりとか？海賊よりも多い？」

ア「そうだな。両方とも合ってる。」

「そうか。なんか俺がここに来た理由がなんとなく分かったよう
な。」

ア「……。」

「ん？あーあれか。」

ア「黒揚羽？」

オ「ん・・・・・・・・・・・・・・・・。」

モ「おい、それを見るな。」

「？」

モ「こいつはクモクモの実を食べた蜘蛛人間なんだ。」

「へー。蜘蛛人間な。世界は広いなー。」

ちよつと待った。蜘蛛人間ってスパイダーマンじゃねえの？だって
そつだろ？へーじゃあ、あいつは指先から糸が出たりしてwww。

（笑）

ア「あ、止まった。」

「地獄蝶だよ。ん？」

『話したい事がある。そこの世界の事だ。』

「山じい？」

『そつじゃ、お主、今違う世界に居るじゃろ？』

「今、ここの世界に虚が暴れてるって聞いた。“その虚を全て退治

せよ” だろ？」

『その通りじゃ。できるかの？』

「相当な・・・膨大な時間が掛かるけどな。それでも良いか？」

『OKじゃ。すまないの。こんなに大仕事を押し付けて。』

「俺は零番隊長だ。元々大仕事しか来ない所だからな。」

『本当にすまない。』

「ああ、俺は任務を必ず終了させます。」

『ふむ。頼んだぞ、“櫻井隊長殿”。』

「了解。」

通話が終わると、地獄蝶は舞い上がった。

「アスク。」

ア「ん？どうした。」

「俺、海軍入るよ。」

セ「！？」

ア「！？いきなりどうした！？」

「俺、ここに来た理由が分かった。ここの世界で暴れている虚を全て排除する事が仕事だった。元々大仕事しか来ない部隊だからな。少し慣れてる。」

ア「そうなんだ。」

モ「全て排除は難しいぞ。」

「でも、仕事なんだよ。隊首会がある時以外はここの世界で任務を終わらせなければならない。ただ、どこかの組織に入っても良し。と言う条件もあるからさ。しかも、ここの世界の事もよく知らないから。で、海軍^{くわい}に入ろうかと。」

ア「私は賛成だ。」

モ「私もだ。」

セ「ふむ。海軍本部の士官学校に1年通って貰ってから正式な海兵にする。それで良いか？」

「OK。」

これで、明日から士官学校に通う日が始まる。

3 なんでもた事情聴取をしなければならぬ（後書き）

はい。とりあえず、仕事が決まりました。
次回から、「士官学校編」が始まります。

4 鍛錬場 〱 破道確認 〱

〱 士官学校の教室 〱

先「はい。今日入学した、昨日いきなり現れて有名人の櫻井 海君です。」

おいおい、小学校の先生かよ。おい！

先「櫻井君は「君付けなくて良い。」櫻井は、任務でこの世界に来てるので、居ない時があります。それでは、真ん中の席へ。」

君付けは気持ち悪い。

後、この席順は毎日変わるらしい。一番前の一番左が一番成績が良い学生だ。

しかし、今日は4月8日。ちょうど、学生達が一学年上がる日なのだ。その時は席順は関係無い。後、このクラスは成績優秀の人しか入れない。

ちなみに席はこうなっている（日常）

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	

今日の席は11番だ。

今日からほとんどの日は、全て体力作り。（勉強する事がほとんど

無いため。)

??「ねえ、ねえ。櫻井。」

「誰だ。」

??「僕は、ファール。」

ファールって、おい。

ファ「よろしくね。櫻井君。」

「海で良い。ファールって呼んで良いか？」

ファ「うん！よろしく！」

「おう。」

ファ「ほら、ほら、早くしないと！成績が下がるよ！」

「後で行くから。」

俺には瞬歩があるからな。瞬歩の速さは夜一と同じくらいで有名だからな。

ファ「えー。行こう！」

「分かった。」

ファ「！！ヤバイよ！あと2分しかないよ！」

「捕まってる。」

ファ「え!？」

「良いから。」

死神の格好にもならずに瞬歩が出来るようになったから楽だ。

ガシッ

「行くぞ。“瞬歩”」 シュンッ

〓大鍛錬場〓

先「遅いな。櫻井とファール。」

シュンッ、スタッ。

ファ「おお!ギリギリセーフ!」

「間に合った。」

モ「!？」

「あ、モモンガ発見。」

モ「今は駄目だぞ。鍛錬だからな。」

「あ、そっか。でも、無理だ。」

モ「・・・」

周りを見ると、（元帥と三大将と参謀と拳骨を除いた）海軍上層部と少将数名と准将数名とクラスメイトが待っていた。

先「櫻井は知らないか。俺は本部大佐だ。」

「あ、大佐だったんだー。」

先「そうだ。」

この人、大佐らしい。

先「今から、何を鍛えても良い。六式を使いたいなら六式を、剣術を磨きたいなら剣を使ってる将校に頼め。俺に頼んでもいいぞ。櫻井は自分で鍛えたいなら、自分でな。以上！」

すると、学生達が将校に頼んで行く。

ファ「なあ！海は？」

「ファールはどうするんだ？」

ファ「僕は六式だよ。アスク准将に頼もつかない？って・・・あ、取られた。」

「ドーベルマン中将とかは？」

ファ「それだ！じゃ！僕行ってくる！」

「おう！」

俺は自分でやらないとな・・・。

先「ん？櫻井は自分でか？」

「そうだが？」

先「頼めば良いだろ？」

「俺の斬魄刀を使うとき霊圧が高いことが多い。」

先「ふむ、そうか。じゃあ、頑張れ。」

「おう。」

どうしよう。鬼道でも鍛えようかな？最近なかなかやってないからな。

誰も居ない所でやろう。

「よし、ここの周りには人は居ないな。」

ここで鬼道の威力を確かめよう。

モ「（何をするつもりだ？）」

ファ「はあ！！」

ドー「あまい！もっと、早く走れ！」

ファールは只今、“剎”に挑戦中。

「破道の四、白雷！」

指先から一条の雷を無事に放つ事に成功。威力もある。壁に焦げ跡ができたけど・・・。

ファ「！？何アレ！！」

んー、物質・・・あ！砲弾発見！

ガラガラ

ガ「おい！死神！その砲弾を・・・？」

「破道の十一、綴雷電！！」

砲弾に沿って、電撃を放った。これも成功。

ガ「！？」

砲弾は無事。まだ使うかもなー。そのままにしよう。

ガ「なんじゃ・・・今は・・・。」

次は伏火か。これは大丈夫だからな。うーん。この砲弾をなんとかしたい・・・あ、あれがあつた。

「破道の五十四、廃炎!!」

円盤状の炎を放ち、砲弾を焼き尽くした。

全員「」「」「砲弾がああああ!!!!!!」」「」

「ん？野次馬？」

ファ「すごいよ！すごいよ！」

「あ、ファール。」

ファ「僕、“剃”習得したよ！今、“嵐脚”に挑戦してるよ。」

「頑張れ、ファール。」

ファ「ああ！」

よし。鬼道はこれができるばもう大丈夫だ。

次は……なんでもいいからとにかく確認しなければ。

4 鍛錬場 〓 破道確認 〓 (後書き)

次回も確認です。なんの確認かは次回で。

5 斬魄刀の威力確認

「……縛道は相手が居ないと無理だし。まあ、良いか。応用系を確認するか。」

応用って、まあ、なんとなく。乱菊が言ってた。

あとさ、物凄く尊敬の視線を感じるんだけど……野次馬とかク拉斯メイトとか。

「なんだ。」

気になるのが、なんで俺こんなに冷静なんだよ。多重人格みたいだな、おい。

ファ「なんか尊敬しちゃう。」

??「櫻井すごウィーね！俺、二口でーす!!」

居るんだ、ここにも、チャラ男が。

二「死神なんだよねー。」

「ああ。お前は……刀？」

二「そうさ！多分、強い方だぜ！？学生の中で。」

「ほう。」

二「手合わせしないか？」

「いや、やめたほうが身の為だ。」

二「何でだよ。」

「後で、斬魄刀の威力確認するから。今は違うけど。」

二「分かった！」

よし、チャラ男が離れたから確認しよう。

で、斬魄刀をぬ・・・あ、ここでやりたくないな。海に向けて放ちたいな。下手すると鍛錬場が消滅しちゃう！

ア「それじゃあ、港へ行くか？」

「？声に出てたか？」

ア「まあな。」

「港に行く。」

ファ「僕、斬魄刀見たい！」

笑)

ファ「……………」(驚)

「今から斬魄刀の出番だよ。」

始解はしなくて良いか。

「まずは銀虎! ……雷砲^{らいほう}!」

文字通り、一振りし、その斬撃が雷の砲弾になり、出てきた海王類を襲う。

ギヤアアア!!!

「悲鳴上げてる……………」

ファ「!?!」

二「斬撃が形を変えた!?!」

そういう技だし。もうちょっと披露しますか。

お? ちょうど海王類がバンバン出てきた! 良い的発見!

「大雷^{おおらい}」

縦に振って出てきた斬撃が雷に変わり、大型海王類を4匹直撃。

「真っ二つだ……………」

モ「・・・・・・・・。」（汗）

「あー俺、三本の斬魄刀に選ばれたから。どれも斬魄刀の中でも伝説級の。」

モ「伝説の伝説!？」

「そんな感じ。」

「次は青龍。・・・・・・・・すいだ水蛇!!」

水の蛇。相手に向かって空間を泳ぐ。

「次は黒鷹。・・・・・・・・ブラックホール黒穴!!」

突如、海王類の真下にブラックホールできた。まあ、斬撃が海中を通してそこにできたものだけだ。ブラックホールだから、海王類が吸い込まれていく。うん。奇妙な光景だな。

あまり使いたくないな！。でも、使う。矛盾してるな。

斬魄刀を納刀する。

ファ「すっげー!!!!!!」

二「こりゃ、勝てないな……。」

モ「そりゃそうだ。」

「ふう。そうだ、白鳳凰も一つやろっか。」

何にしよう。……。あ、技はゾロとかと一緒にの事が多いから。

「一刀流、飛竜^{ひりゅう}火焰^{かえん}!!」

はい、ゾロと同じ技です。

「確認終了。んゝゝっ、はあ。とりあえず休憩。」

5 斬魄刀の威力確認（後書き）

技が・・・普通。（笑）

しかし、疲れた・・・。

次回は決まっていね。学校で考えてきます・・・。

6 この世界に来て初めての虚退治

「翌日」

ファ「海————！！！！！！！！！！」

「なんだよ。ふあ~~~~」

ファ「港に変な生き物があるんだよ！！巨大の！」

「まさかな・・・。」

まさか、虚じゃねえよな！？俺はいつも死神の格好にしてる。

いつでも出撃出来る様に。

「ちょっと行って来る！“瞬歩”！！」シュンッ

ファ「ああ！！！！行っちゃった！！！！追わなきゃ！！！！」

「軍港」

海兵「なんだよ、この生き物・・・。ヒイ！！」

??「オイシソウダナ・・・。」

海兵「ど、どうか行け！」

??「クワセロ・・・。」

海兵「・・・」ガタガタ

シュンツ、スタツ。

まずい！海兵がやられる！

ザシュツ・・・スーーーーー

危ねー。虚を斬り遅れたらこいつ死んでたな。

「大丈夫か？」

海兵「・・・。」

「あーあ。失神してるし。」

まあ、しょうがないな。

ファ「海——————!!!!!!……!?!」

ア「大丈夫か!?!」

「あ、アスク。ちょうど良いところに来た。この海兵よろしく。」

ア「こいつ……失神してる。」

「虚に襲われそうになって、失神した。虚は斬っておいたから大丈夫。これから忙しくなりそうだ。」

ア「そうだな。」

ファ「え!?ここにも出たの!?!」

「ああ。」

ファ「怖いよ————!!!!」

「お前、軍学生だろうが。」（苦笑）

ファ「これは、無理————!!!!!!!!」

だろうな。いくらなんでも一般は無理だろう。

ファ「ねえ!報告書とか書くの?」

「当たり前だ。」

ファ「ええ!？」

「でも、書くことは少ないからな。」

ファ「そうなんだ!。」

「ああ。戻るぞ。」

ファ「ああ!待ってよー!。」

〓教室〓

先「今日の朝にホロウを発見し櫻井が対処してくれましたが、緊張は無くなりません。」

二「え、じゃあ。海は?。」

二口は席順番号は3番。

ガラガラ

ファ「遅くなりました。」

ファールは席に着く。ちなみに番号は2番。

ガラガラ

「アスクの所に居ました。」

先「ご苦勞様です。」

「どうも。」

ファ「海！海は1番だよ！」

「ああ。」

どうやら、1番のようだ。

先「1番の櫻井 海。2番のラックス・ファール。3番のレオ・ニコ。以上3人は一年間番号は変わる事は無い。実力が分かった。昨日、海軍上層部と政府上層部が会議で決めた事だ。」

??「すっげーな！」

「?。」

誰だ？

??「俺はオリック。ラニーヨ・オリック。今の番号は六番！よろしくな！」

「よろしく。」

こいつは、最も外国人っぽい名前をしてるな。

先「櫻井は今日・・・今から、海軍本部の上層階へ行け。その階段で案内の海兵がいるはずだ。そいつに着いて行け。今日は海は仕事のみだ。」

「分かった。」

早速、行こう。

6 この世界に来て初めての虚退治（後書き）

次回は仕事です。

7 総帥と対面

「階段」

階段を上り始めてからどのくらいの時間が経っただろうか……。

海兵「あ！」

「……………」

海兵「気づいてください！」

後ろ？

「……朝、虚に襲われそうになった海兵か？」

海兵「はい！助けてくれてありがとうございます！」

「まあ仕事だからな。」

海兵「もしかして、上層部に会うんですか？」

「そうだが。まさか、お前が案内役か？」

海兵「はい！！僕です！！付いて来て下さい。」

「ああ。」

しばらく歩いて、大きな扉の前に付いた。

海兵「ここです！では！今日はありがとうございました！」

「ああ。じゃあな！」

………前^{ふすま}言撤回。扉じゃなくて、襖^{ふすま}だった。

………つか、大きすぎるだろ。なんだよこの大きさは……。巨人族が居るから納得できるけど、よくこんな大きい襖をあけられるよな！。まあ、ここの世界の人間って大きい……。人間じゃなくて、もう生き物全体がデカイか。ここは弱肉強食の世界だな。

「よっ！」

スススーーーーッ

どどーーーーん！！！！！！

「……………」(汗)

サ「わしゃあ、サカズキじゃい！大将じゃあ！」

「怒る事はないと思うが？」

サ「うるさいけえの！」

「はいはい。……はあ。」

ここは、大丈夫だろうか。身の安全を大切にしないとな。

セ「その席だ。」

ここか。

セ「ふむ。」

??「センゴク、ちよつと良いか？」

セ「コングさんどうぞ。」

コン「おれは、世界政府総帥のコングだ。」

「俺も名乗った方が良いか？」

コン「そつだな。政府の人間は知らん。」

「俺は、護廷十三番隊特別部隊通称“零番隊”の隊長、櫻井 海だ。」

コン「零番隊って事は普通の隊より強いって事か？」

「そうだ。零番隊はまだ一人しか居ない。」

コン「お前だけか。」

「ああ。」

コン「まあ、お前の威力確認だったか？それを見たが・・・、強すぎないか？」

「あれは基本だが？」

コン「！？あれで基本って言うつもりか！？」

コングはバンツッと机を叩き怒鳴る。

「だから、さっきので察してくれ。俺は零番隊隊長だ。」

コン「隊長がどうした！」

セ「何故、そんなに落ち着いてられるのだ？」

サ「覇気が出てるっちゅーに。」

なんか言ってるし。

「零番隊だ！」

コン「それがどうした!」

「零番隊だから、それくらいの強さが無いと勤まらないんだよ!!
!分かったか!!」

あ……怒鳴っちゃった。

コン「………すまない。」

「いや……。」

コン「気にしないでくれ。だが、今は本当にすまなかった。」

「……。」

なんか、気まずいぞ……、この空気……。

7 総帥と対面（後書き）

終わり方があああ・・・・・・・・orz。

8 今後について

沈黙が続く。

「・・・・・・・・・・」

その沈黙を破ったのは、

セ「コングさん・・・・。」

センゴクだった。

コン「ああ。」

セ「櫻井。今後について話す。」

「今後？一年後の事か？」

セ「そうだ。」

「一年後は俺は海兵。階級か？」

セ「察しの通りだ。櫻井の階級についてだが、卒業したら少尉から初めて貰う。」

「何でだ？俺が一番だからか？」

セ「そうだ。だが歴代の一番だった海兵はここにも居るが、少尉か

らは始まらない。皆、曹長からだ。何故、少尉から始まるか。それは、櫻井の実力を見て私達で決めた事だ。」

「まあ、俺は拒否しないけど、拒否権は無いんだろ？」

セ「そうだ。それでだな、この一ヶ月間どうするんだ？」

「そりゃあ、仕事だろ。」

セ「そうか。見ることは？」

「さあな。」

セ「……………。まあ、いい。もう用は無い。」

「そうか。じゃあ、俺は戻る。」

ガチャ……………バタン

ふう。教室もど……………あ、もう終わってる。

食堂行こうかな？

「食堂」

ざわざわ

賑やかな食堂で飯を受け取る。

ファ「あ！海！」

ファールの向かい側に座る。

「よお。なあ、お前って卒業後の階級って決まってるか？」

し――――ん

いきなり静かになった食堂。

「どうした。」

ざわざわ

ファ「決まってるけど。」

し――――ん

再び静かになる食堂

トントントン

調理の音しか聞えない。

二「おれも決まってるよ！」

トントント

あれ？止まった？

トントントン

「階級は？」

なんか海兵らが止まってるぜ？なんでだ？

ファ「軍曹から。」

トントン・・・トントントン

一回止まったぞ？

二「俺も軍曹から。海は曹長からだろ？」

トントントン

「いや、俺は実力を買われて“少尉”から。」

・・・

あ？確実に止まったぞ？

全員「「「「「「「「「少尉”からああああああ！！！！！！？？？
？」「」「」「」

「よくハモるなあここは。」

いつもそう思う。

ファ「え！？マジ！？」

「だってさつき言われたもん。」

？？「ヘルメツポさん、あの人凄いですよ。」

へ「聞いたらわかるだろ、コビー。しかも、俺達も見たからな。」

コ「なんか憧れます！」

へ「まあな。」

ア「へえ。“少尉”からか。頑張れよ？」

「ああ。」

ア「そついえば所属部隊は？」

「あー、中将以下を希望したよ。毎年変わるらしい。まあ、変わら

ない事もありそうだけど。抽選だから。それで、今日ここで……
あ、来た。」

ア「おお。抽選箱だな！」

「ここから引くようだ。」

オ「この中に紙が入ってる。初回は、中将１１名だが、ラクロワと
かも入れて欲しいと言ってたが……良いか？」

「？」

オ「巨人族だ。」

「別に良いよ？」

オ「そうか。」

「……となると？１３名か？」

ガサガサ

オニグモが抽選紙をかき混ぜてる。

オ「そうだ。この箱に手を入れて一枚だけ取れ。」

「……なあ、何でお前らまで……。」

ファ「だって、これで決まるんだよ?」

「そうだけどさ。」

ガサガサ

ファ「とか言いながらも手突っ込んでるじゃん!」

「まあな。これで良いか。」ヒョイ

オ「誰だったか?」

紙を開けるとそこに書いてあった名前は……

D a l m a t i a n

ダルメシアン中将だ。

オ「ちょっと、待った。ヒントくれ。」

「ヒント?・・・名前に動物名が入ってる奴。」

ガーン

入っていない中將が落ち込む。

オ「うむ。誰だ？」

「犬。」

オ「犬？」

ドー「俺か？」

ダ「いや俺だろ。」

「後者。」

ドー「……………」

ダ「俺か？」

「ああ。よろしく。」

ダ「よろしく。」

ドー「あ……………」

「あはは……………ドンマイ。」（苦笑）

ドー「あ……………」ガクッ

あ、落ち込んだ。

ダ「フツ。」

ドー「調子乗るなよ！」

ダ「ドンマイ。」（微笑）

ドー「う・・・。」

ダルメシアン、笑ってないか？微妙に。なんか勝ち誇った顔でもあるけど。

オ「決まりだな。一年後には、ダルメシアンの専属海兵だ。」

「分かった。」

そういえば、

「ファール！ニロ！お前らはどこ？」

ファ「俺はガープ中将。」

ニ「俺は青雫大将。」

「へへ頑張れよ。なんかそこ嫌な予感がするからな。」

ファ「え！？」

「俺の予感はずっと的中する。」

「えー！？でも大丈夫だよ！！」

「なら、良いけど。」

まあ、卒業後の初回の専属上司が決まり、階級が決まった。

8 今後について（後書き）

疲れたー。

こんな感じです。

次は．．．．．なんだっけ？次回は今日か明日更新。

9 複数系鬼道成功

「1時間後」

ファ「あーすごいね！」

「あ、俺もビックリさ。歴代の一番は毎回曹長からだからな。」

ニ「それより2つ上がったんだね！」

「そうみたいだ。」

ガ「ファール！二口！櫻井！」

「んあ？」

ファ「ガープ中将！卒業後よろしくお願いします！」

ガ「よろしくじゃ！それでの！今から、わしら中将の部下全員集めて、超大規模鍛錬を行うのじゃが行くか？」

ファ&ニ「行きます！」

ガ「そうか。なら早くいつもの場所での！」

ガープはそこに向かっていった。

それだったんだな。他の中将達と海兵達がいつの間にか居なくなっ

てたし。

ファ「海！俺ら先に行くからな！剃！」 シュン

ニ「剃！」 シュン

あーあ。まあ、俺の方が速いし。

「瞬歩」

シュンッ

〃大鍛錬場〃

ここはいつもと同じ場所だが、高さが調整されていた。

シュンッ、スタッ

「ふう。」

全員「「「「「！？」」「」「」「」

シュン

シュン

ファ「あれ!？」

ニ「え!？」

「あ、これは“瞬歩”。」

ファ「なんでそんなに速いの!？」

「秘密。」

ニ「えーーーーー!!!!!!」

「なあ、これって俺何すれば？」

ダ「こっち来い。」

「おう。」

ガ「ニロ。ファール。こっちへ来るんじゃ!」

ファ「はい!」

ニ「はい!」

ダ「海。って、呼んで良いか?」

「ああ。」

ダ「海。俺の部下と手合わせしろ。」

「全員でかかって来い。まあ、すぐ終わるけど。」

ダ「はあ？」

「ここに居る全員！二口とファールも含めてだ！全員で俺に懸かって来い！！」

二「海？」

モ「正気か！？」

「相手してやる！勝つ自信はある！」

ダ「何言ってるんだ？」

「・・・どんなに多くても一瞬で終わると思う。」

ダ「へえ。じゃあ、5分後に行くぞ？」

「ああ。どっからでも来い。手加減は無しだ。基本で行くからこつちは。」

ファ「何がしたいの？」

「限界を試したいんだ。」

ファ「あ、そういう事か。」

「5分後だ。」

鬼道の限界を試したかった。俺は零番隊長。尸魂界では試す事はできない。限界は最初の“一”から。今から行おうとしているのは、『縛道の一、塞』これだ。

それを今からその複数の人数に向けて行っ

（5分後）

ダ「本当に行くぞ！お前ら行くぞ！」

ウオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

叫びながら来るなよ。五月蠅い。おお、さすがだ。剃使ってる奴も居る。

さて行きますか。

「『複数系縛道の一、塞』！！！！」

ダ「うつ．．．。」

モ「なんだこの金縛り．．．ではないが！」

ファ「あああああ！！！！！」

二「痛い！」

コ「なんですか、これ！」

へ「まったく解けないぞ。」

「ふう、成功。（解け）」

ダ「はあ、開放された。」

モ「はあ。」

ファ「やっぱり、勝てないよ。」

二「今更かよ。」

コ「はあ。やっとだあ。」

へ「なんなんだ？」

「どうも。」

ダ「ああ。確かに、勝てないな。」

「ああん？」

「どうした？」

[illegible]

「あ、これ虚発見のサイレン。抜けるよ。」

ダ「ああ。どこだ？」

Handwriting practice lines for the letter 'e' (e) in a cursive script. The image shows five rows of dashed lines for tracing, each starting with a solid 'e' and ending with a small circle indicating the starting point for the next letter.

「ダ、増えた？」

「そうだな。だが全て違うところだ。ここは影響が無い。行ってくる。」

「ダ
「
おお。
」

シュ
ンツ

「ファ、相変わらず速い……。」

10 シャボンディ諸島46番GRのボスと対決

ここはシャボンディ諸島。

「46番GR」

46番GRは、無法地帯。そして、海賊の集まり場所にもなっている。が……

グオオオ！！

虚も集まってしまうようだ。

「ちつ。なんでこんな無法地帯に。」

『クワセロ……』

「ん？大群？あ、そんなに多くないな。7体。全部ここに集まってきたか。」

『死神——！！！！ソノタマシクワセロ——！！！！』

「残念。俺は他の死神と比べるなよ。」

「その衝撃は雷より竜巻よりも強し。“雷竜巻”」
始解はしていない。

雷と同じくらいの電圧を縛った竜巻が虚に襲う。

ギヤアアア！！！！・・・スーーーーッ

「フンッ。雑魚が。」

??「誰だ？貴様、俺の縄張りに入るとはな。いい度胸してるではないか。ハハハ。」

「誰だ。」

??「俺はジャッキー。この46番GRのボスさ。」

「海賊か？」

ジ「世間では、そう言われてるが。今は元海賊でここのボスだ。」

「あんまり変わらないだろうが。」

ジ「ふん。貴様も名乗れ。」

「俺は櫻井 海。」

ジ「そうか。海。手下に入らないか？」

「断る。俺は現在海軍士官学生。来年は少尉だ。」

ジ「ほう。海軍さんか。じゃあ、相手してもらうか。」

「手下も、か？」

ジ「当たり前だ。テメェら！出て来い！こいつに向かって存分に暴

れる！」

ウオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

「うつせえな。つたく、雑魚が。」

ジ「ふん。数は多いからな。」

だいたい、200人ぐらい居る。でも海兵より少ない。簡単だ。鬼道でいこう。

『複数系鬼道、縛道の一、塞』

ギヤアアアアアーーーー！！！！！！！！

ジ「何！？」

「俺をなめない方が良いぜ？」

ジ「貴様ーーーー！！！！！！！！！！おらあああ！！！！！！！！」

「ずいぶんと間違った使い方をしてるな。」

刀を振り回してる。

ジ「うるせえ！今は貴様を殺すのみ！」

「あ、お前懸賞金は？」

ジ「二億5000万だ!」

「へ、意外と高いんだね。でも、残念お前は負ける。」

ジ「誰にだ!」

「俺に。」

ジ「やってみるお!」

「『縛道の九、撃』『破道の十一、綴雷電』」

まず、ジャッキーを赤い光で縛って、綴雷電を撃つ。

ジ「うがああ!!!」

「だから、言っただろう? まあ、海軍本部に戻るからさ。連れて行くよ。」

あ、でもこいつらどうしよう。あ・・・

(青龍!)

(なんだ。)

(こいつら、海軍本部に連れて行くから、手伝って?)

(分かった。)

青龍が刀でもなく人でもなく龍になった。

青「これで良いか?」

「ああ。俺も乗ろう。よつ。」

青「しっかり捕まれよ。」

「おお。」

角を持つ。

青「角？」

「え？駄目？」

青「いや、駄目ではないが。（角は敏感なんだよ。海）」

「行け。」

青「お、おう。」

「海軍本部」

海軍本部に無事に着いた。

兵「なんじゃこりゃあああ！！！！」

「青龍。いつもは斬魄刀だが。おい、戻れ。」

シュルルル

青龍が元の形になる。

兵「なっ！そいつは……。」

ファ「あ！戻って来たあ！」

「ファール、五月蠅い。」

ファ「ええ！？酷っ！！」

「ジャッキー。懸賞金2億5000万B。シャボンディ諸島の46番GRのボスらしい。他の奴らはその手下だ。」

二「ええ！？学生なのに億越え捕まえっちゃったの！？」

「お前らいちいちうるせえ。」

ファ「あ、ごめん。」

しかし、どうやって懸賞金決めてんだ。でたらめではないのか？アスクにでも聞いてみるか。

10 シャボンディ諸島46番GRのボスと対決（後書き）

まあ、簡単に判決がきましたー。

11 残り1ヶ月にサバイバル競争修学旅行決定

ここは医療施設。

「アスクゝ居るか？」

ア「大声出すな。ここは医療施設だぞ？」

そだった。ここは医療施設だったね。てかさっき自分で言った。
・・（笑）

ア「で、なんだ？」

「医療とまったく関係ないけど、懸賞金ってどう決めてるの？」

ア「え？なんでそんなことをいきなり？」

「今日さ、“剣振り”のジャッキー捕まえたんだよ。で、あまりにも弱かったからさ。」

ア「（そんなに弱くないけどな）報告書で決まるよ。」

報告書かよ。基準無いじゃねえか。

「でも、最終的には？」

ア「最終的には会議だな。だから大海賊時代になってから会議が増える。」

「へー、でも実際にたらめだと思う。なんでコイツがこんなに高い

んだ？っていうのがたまにあるし。」

ア「たしかに。」

「まあ、ありがと！」

ア「ああ。（海が報告書書いたら懸賞金は上がりにくくなるな。）」

それから約11ヶ月。現在3月。

そして、先生から発表があり、

「今日から1ヶ月サバイバル競争修学旅行を行います。ペアを組んでも組まなくても良いけどこれは、組んだ場合結果を人数で割る事になるので組まない事を薦めます。この結果は卒業後の階級に影響が出ます。仮で決まってる3人も上下するかもしれないので気をつけるように。以上！それでは開始！」

・・・・・・どうやらこの一ヶ月ずっとこの内容のようだ。正直言ってつまんねー。

ファ「海？行かないの？」

「あ？あ、お前はどこ行くの？」

ファ「え？ローグタウン。二口と偶然一緒だったけど？」

「俺は………なんなんだよ！！」

周りがこつち見てるんだけど……。

先「どこに行くんだい？」

「シャボンディ諸島。そこの方が暇じゃないと思って。虚も集まり易いから。」

ファ「そんな理由なんだね。」

「ああ、俺はもう行くから。」

ファ「うん！じゃあね！」

「ああ。」

シュンッ

ファ「え？普通瞬歩で行く……？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4503y/>

大海賊時代に来た死神

2011年11月21日13時33分発行